

れている。この作品の内容を吟味すると、一、二句で「春雪」を「梅花」に喩える比喩表現が使われている。こうした見立ての技法は中国の詩でも多用されている。(詳細は後論に譲る)そして三句目では、次の匈奴の捕虜となっていた蘇武の故事が「雁足」に込められている。

昭帝即位数年匈奴与漢和親。漢求武等。匈奴詭言武死。後漢使復至匈奴常惠請其守者与俱得夜見漢使。具自陳道、教使者謂單于言、天子射上林中得鴈。足有係帛書言武等在其沢中。使者大喜如惠語以讓單于單于左右而驚謝漢使曰、武等实在於是。

(『漢書』蘇武伝)

この話の大意は、「漢と匈奴が和睦し、漢は蘇武一行の帰還を求めたが、匈奴は蘇武は死んだと偽って応じなかった。のち漢の使者が匈奴を訪れた時、蘇武の部下であった常恵がひそかに使者と会い、匈奴の王單于に次のように言うようにしむけた。「漢の帝(＝昭帝)が上林苑で雁を射落としたところ、足に帛きぬに書いた手紙が縛り付けてあり『蘇武たちはある沼沢の中にいる』と書いてあった。」と。使者はそのとおりに單于に告げたものだからさすがの匈奴も隠すことが出来ず、蘇武が生きている事を認め、(蘇武を帰還させることを承認した。)」となる。これは、『藝文類聚』卷五十六「雜文部・書」の「雁書」の項に<sup>(4)</sup>、又、第九十一「鳥部・雁」の項にも同様の話を載せる。<sup>(5)</sup>

一方四句目では「烏頭」の語に、燕の太子丹が、烏の頭が白くなったので帰国を許された次の故事が込められている。